かゑらじと　かねて思へハ　梓弓
なき数に入る　名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信　第 32 号
平成 28 年 9 月 13 日
発行＝四條畷楠正行の会
〒575-0021　四條畷市南野 5 丁目 2 番 16 号
四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

8/28　四條畷市詩吟連盟吟詠大会に出席

朱舜水の残した正行賛文について小楠公講話

楠氏関係の吟題多数

8 月 28 日（日）、四條畷市立教育文化センター2 階大ホールにて、四條畷市詩吟連盟主催・四條畷市文化連盟後援の「第 54 回　吟詠大会」が開催され、扇谷は、講師として招かれました。

昨年に引き続いての出席でしたが、支部合吟・会員吟詠・役員吟詠と、約 2 時間半の吟詠を楽しませていただきました。

吟題の中で、楠氏関係も多数入っており、「小楠公の墓を弔う」「大楠公」「かえらじと」「小楠公の母を詠ず」等が披露されました。

約 50 名の方が出席しておられましたが、どこからこのように大きな声が出るのか、と思うばかりの声で吟じられると、その詠われる光景が目の当たりに浮かぶようで、楽しいひと時を過ごすことができました。

扇谷の講演は、「小楠公講話」と題して、行いましたが、その講演の内容を以下に採録いたします。

● 正行賛文の発見 ●

今回は、朱舜水が残した正行公の賛文についてお話したいと思います。

明の儒学者、朱舜水が作った正成公の賛文は、徳川光圀が建立しました湊川の「嗚呼忠臣楠子之墓」の碑陰に刻まれたことで、多くの幕末の志士たちが訪れ、明治維新開花の象徴ともなったことから、広く世間に知られています。

この正成公の賛文は、加賀藩主、前田綱紀が狩野探幽に書かせた楠公父子別れの図に載せるため、朱舜水に依頼されたものであることから、父子別れの図であれば、正行の賛文も残しているのではないかと、私は探し求めました。

そして、昨年、３月１６日、この日を忘れもしませんが、国立国会図書館関西館で、徳川綱條が編みました朱舜水全集の稲葉君山編の原典に、朱舜水の正行公賛文を発見しました。

１４８文字の賛文ですが、その一説に、文天祥の「零丁洋に過ぐ」からの引用があります。

今日は、この文天祥、朱舜水、そして正行に関わって、少しお話をさせていただきます。

● 文天祥の「零丁洋に過ぐ」 ●

文天祥ですが、中国で、西暦５９８年から１９０５年まで、約１３００年続きました、世界一難関と云われます官吏登用試験、科挙があります。

この科挙は、３年に一回行われます。

１２５６年、地方で行われる殿試、中央礼部で行われる二次試験ともいえる省試、そして宋代に始まった、最後の難関、皇帝による三次試験、殿試の合格発表が、５月２４日に行われました。

この時、トップ、第一甲首席状元として、その名が読み上げられましたのが弱冠２１歳の文天祥でした。

官僚のトップ、宰相を約束された文天祥を待ち受けていたのは、異民族、モンゴルの侵略でした。そして、南宋の宰相となった文天祥は、劣勢の中、和睦の使者とし

てモンゴル宰相の下に乗り込みますが、捕えられの身となり、南宋の都、臨安は落城します。

しかし、運よく脱出に成功した文天祥は、辛くも南に落ち延びた南宋の亡命政権のある福州に入り、再び宰相職を与えられますが、実権は与えられませんでした。

そして、元は中国全域を手中に収める中、南宋の亡命政権は厓山に逃れます。そして、戦いの日々が続く中で、文天祥は再び捕らわれの身となります。

元の大将、張弘範は、文天祥に向かって、「宋は滅びました。あなたはもう十分に忠義を尽くされました。我が皇帝のもとで働かれてはいかがですか。」と、崖山にこもる張世傑に投降を呼びかけるよう促し、フビライへの降伏を呼び掛けます。

この時、その返事として送ったのが、有名な七言律詩「零丁洋に過ぐ」です。

文天祥の真情溢れる結びの句、「人生、古より誰か死なからん　丹心を留取し、汗青を照らさん」を見た張弘範は、”静かにさせておこう”と、断念をするのです。

● 朱舜水の正成・正行賛文 ●

朱舜水ですが、明末の争乱期、満州に起こった清が揚子江辺りまで攻め取っていました。その時、明政府は舟山列島に立て籠もっていました。

明代随一の儒学者であった朱舜水は、１２度にわたり出仕を勧められますが、いずれも断ります。朱舜水は「王者の政」をすべきとの考えでしたので、当時の、堕落した政府に反発をしたのです。

しかし、明復興の思いは誰よりも強く、王翊とともに他国の助力を、と安南行きを決行しますが、日本に漂着します。そして、１６４５年から１６５９年までの１５年間に、実に七度、長崎を訪れ、いよいよ最後７回目、周山も落城し、６０歳のとき、失意の中で日本に投下します。

投下した長崎で安東省菴と出会い、水戸へ。そして、徳川光圀の下で水戸学の師となります。

おりしも、朱舜水が投下した万治３年、１６６０年、加賀藩主、前田綱紀は狩野探幽に「楠公父子分かれの図」を書かせ、その賛文を、木下順庵・安東省菴を通じ、朱舜水に依頼します。

依頼を受けた朱舜水は、安東省菴の三忠伝を何度も読み返し、１０年の歳月をかけて賛文をつくり、「楠公父子別れの図」は軸物として完成するのです。

朱舜水は、明復興一筋に生きた自らの生涯と、正統な天皇親政実現・復権一筋に生きた正成・正行の生涯を重ねたのではないか、と思います。

そして、元禄２年、１６９２年、徳川光圀が湊川に「嗚呼忠臣楠子之墓」を建立し、その碑陰にこの賛文を刻んだことで、正成公の賛文は一躍有名になりました。

● 正行の事績、汗青を照らす ●

私は、正行研究を続けていますが、楠一族の最大の難敵は“史料が残っていない”ということです。だから、史実に基づいて確かなことが言えないのです。

私は、「楠公父子別れの図」の賛文、「親」と「子」の別れの賛文であれば、正行公の賛文も作っているのではないかと、と考えました。そして、ネットで朱舜水研究の論文を片っ端から調べ、図書館に協力いただき江戸期の文献等調べ、冒頭お話しましたように、昨年、３月１６日、遂に発見したのです。

それが、この１４８文字の賛文です。因みにこの書は、本日ご出席の、真木様（正行の会会員）の書です。

この正行賛文の末節に、文天祥の「零丁洋に過ぐ」からの一説、「人生古より誰か死なからん　丹心を留取し、汗青を照らす」が入っているのです。

人間生まれたからには、みんな死に行くものである。
どうせ死ぬのなら、
至誠忠義の心をしっかりと世に残し、
長く歴史に輝かしたいものだ、と。

汗青とは、昔、紙のなかった時代、竹を火にあぶり、青みを去り、油を抜いて、そこに漆で文字を書いたことから、文書、歴史書等の意味につかわれます。

● 三人に共通する生き様 ●

私は、文天祥、朱舜水、楠正行、この三人に共通の生き様をみます。

そのことは、朱舜水の正行賛文に、文天祥の「零丁洋に過ぐ」からの一節が入ったことで、明らかです。

元に最後まで屈することなく、南宋の義士としてフビライに処刑された文天祥。

異国の地、水戸の地に眠る事となりながらも、最後まで明復興に一生をささげた朱舜水。

正当な帝・南朝復権をただ一つの義として生き抜き、２３歳の若さで四條畷の地に散った正行。

この三人は、それぞれ、至誠忠義の心をしっかりと世に残し、今も、歴史に輝きを残しています。

私は、正行公の生きざまを後世に伝えるため、朱舜水が残しました、この 148 文字の賛文を、世に広めてまいりたいと考えています。

そして、私たちの郷土、四條畷を終焉の地として散って逝った、楠正行が、義一筋に、何が正しいか、どうあるべきか、誠一筋に生きた生きざまを後世に伝えたいと願っています。

（この日持参した資料）

・嗚呼忠臣楠子之墓拓本
・嗚呼忠臣楠子之墓碑陰拓本
・狩野探幽作「楠公父子別れの図」
・朱舜水正行賛文（真木氏書）

（文責「四條畷楠正行の会」代表　扇谷昭）